

## 第2回

# 学習問題をつくる場面でひと工夫

### 1. 学習問題は追究力を高める「社会科授業の核」

「先生、聞いて！ 私、気になって昨日スーパーの店長さんにもう一度インタビューしてきちゃったんだけど、実はね…」

「僕、昨晚ネットでもう一度調べたら、自分の考えが変わってきちゃった。今日の社会の授業で、みんなの意見がメッチャ気になる…」

自らの力で調べ、考えてきた子どもの目は輝いています。そして、その言動には勢いがあります。社会科の授業をしていて、本当に嬉しい瞬間です。

子どもたちとともに、このような授業をつくりあげていくためには、子どもたち一人ひとりが、社会的事象に対して問い（問題意識）をもつことが必要不可欠です。なぜなら、問いをもつということによって、教師の教えるべきことが、子どもの学びたいことに転化するからです。

そして、その一人ひとりの問いは、クラスの子どもたちみんなで追究していく問いとして統合されたり増幅したりして、学習問題として成立します。

このような学習問題の成立によって、子どもたちが主体的に問題を追究するエネルギーを生み出し、問題を追究する過程で調べたり考えたりしながら、自ら知識を獲得し、より学習内容を深く理解していきます。したがって、学習問題は、子どもたち一人ひとりの追究力を高める「社会科授業の核」と言えます。

### 2. 子どもたちとともに作りあげていく学習問題

ところが、学習問題を成立させることは決して容易なことではありません。

学習問題は、社会的事象と出会った子どもたちの単なる思いつきや疑問ではなく、あくまでも社会科学習の本質（授業の目標）へと導く問いでなければなりません。また、問題解決学習の本質からいうと、学習問題をつくるのは子どもであることが望ましいのですが、そのせいか、学習問題の言葉を何とか子どもたちから引き出そうとして、教師による誘導尋問を繰り返しているような授業を見ることも少なくありません。

大切なことは、子どもたち一人ひとりに社会的事象（具体的な事実）をじっくりと見つめさせ、「なんとしても追究していきたい」という問い（問題意識）をもたせることです。学習問題は、子どもたちとともに作りあげていくことを通してのみ成立するといっても過言ではないでしょう。

この連載の第1回は、子どもたち一人ひとりに問いをもたせるために、「おかしいよ！」

「えっ、そんなに?」「ひどい!」などという声がわき出るような「事実とのインパクトのある出会いを演出する」ためのポイントについて、具体的な事例に沿って考えていきました。

ただ、子どもたちとともに学習問題をつくるとなると、子どもたち一人ひとりの問いはどうするのかという疑問が浮かびあがってきます。多くの心ある教師が悩んでいるのは、「子どもたち一人ひとりの問い（問題意識）と、教室に一つだけの学習問題（授業の目標）とのズレをどのようにすればよいのか」ということではないでしょうか。

教室に一つだけの学習問題にするには、一人ひとりの問いを整理し、教師と子どもたちの中で合意形成することが必要になります。ただ、うまく合意形成できなければ、何人かの問いは切り捨てられることにもなりかねません。

そうならないように、子どもたち一人ひとりが同じ方向性の問いをもてるように教材の提示の仕方や発問を工夫する必要があります。ここが教師の腕の見せどころです。しかし、授業研究会などでこの場面がよく問題になっているように、子どもたちとともに学習問題をつくることの難しさに、多くの教師が悩んでいる実態があります。

そこで今回は、三つの具体的な事例に沿って、子どもたちとともに学習問題をつくりあげていく様子を示しながら、そのポイントについて考えていきたいと思います。

### 3. 文京区のどこで火事が起きても、5分以内に消防自動車が登場できるのはなぜか？

ー 3・4年下 p. 20, 21 「災害からまちを守るために（火事について調べよう）」ー



防災訓練で消火器を使った消火体験や、煙体験などの活動をした直後、

『もし、自分の家が火事になったらどうする?』

と問います。すると、子どもたちからは、

「避難する。」

「お・か・し・も（押さない・駆けない・しゃべらない・もどらない）の約束に従って避難する。」

「消防署に連絡する。」

などの声が飛び交います。すかさず、

『消防自動車は、どれくらいで火事の現場まで来てくれると思う?』

と問い返すと、「15分」「30分」「10分」…。

『学校が火事になったら、何分で消防自動車が到着するか、小石川消防署大塚出張所の方に聞いてみました…。』

じらしながら「5分」と板書します。

「えっー!」「そんなに早く到着できるんだ!」「赤信号でも止まらなくていいから…。」  
『消防署の人たちはこのような服を来ていますね。』

と言いながら消防士の防火服の写真を提示します。

じっくりと見つめさせていくうちに、ヘルメットや酸素ボンベ、手袋、マスクといった他の装備や、それらの用途についても関心が高まっていきます。

『防火服を着る時間はどれくらいかかるだろうね…。』

子どもたちに避難訓練用のヘルメットを提示すると、「ぼくもやってみたい!」「わたしも!」。

そこで、試しに体操服から制服に着替え、ヘルメット、重いナップザック（酸素ボンベの



代わり)、手袋、安全靴などを着用する時間を試してみました。だいたいどの子も1分半前後でした。このような体験をもとに、防火服を着る時間の予想を出させた後、消防士が防火服を着る様子を撮影した映像を提示します。

「何か叫びながら着ている!」

「28秒だ。すごい!」

「これなら、学校が火事でも5分で到着することができそうだ!」。

教室の壁には、文京区の地図が掲示されています。自分たちがいる筑波大学附属小学校は地図の西側にあり、さらにその西側には子どもたちが3年生の時にまち探検の学習で訪れた小石川消防署大塚出張所があります。学校の東側には小石川消防署があります。地図全体に目を広げると、区の南端には東京ドームがあります。そこを指して、子どもたちに問います。

『では、文京区が一番端で火事が起きたら、消防自動車は何分で到着できると思いますか?』

「30分」「1時間」「え〜、そんなに時間がかかっては困るよ」。

子どもたちの予想は、

5分…0人、10分…0人、15分…8人、30分…20人、わからない…3人 でした。

『文京区の端まで、何分で行けるかな…。』

そして、「文京区のどこで火事が起きても5分」と板書します。

「ええーっ」と子どもたち。こちらも『なんで、ええーっなの?』と返します。

「おかしいよ。だって、学校までの到着時間と同じだよ!」「そうそう、だって地図であんなに離れているじゃない!」「本当にどこでも5分なの?」

『そう、どこでも5分以内…。今のみんなのそのビックリを、文章にしてみたらどうなるかな?』。

このような子どもたちとのやりとりの中で、

**文京区のどこで火事が起きても、5分以内で消防自動車が到着できるのはなぜか?**

という学習問題を子どもたちとともにつくることができました。

#### 4. なぜ12年もの間、工場の排水は止まらなかったのか？

－5年下 p. 57「生活環境を守る人々（工業の発展のかけで）」－

水俣病患者の手の写真(W. ユージン・スミス, アイリーン・M. スミス著『写真集水俣』三一書房所収)をいきなりアップで提示します。

「病気の人の手だ」「固まっていて動かなそう…」「これでは箸も握れないよ！」などの声が子どもたちの中から出てきたところで、写真をルーズにし直して提示する。「あっ」「患者さん！」。

そこで、5歳で発病し8歳で亡くなった水俣病の公式認定第1号患者である溝口トヨ子さんの詩を何も言わずに提示しました（【資料1】）。

子どもたちには、自分が気になるところにマーカーで線を引くよう指示し、引いた箇所やその理由を語ってもらいました。

「“しゃくらん しゃくと がっこうに いくと”ってところに線を引いたんだけど、トヨ子ちゃんが、本当に楽しみにしていた学校が、行けなかったところが悲しかった。魚や貝を食べただけなのに…。」

「僕は“1953年12月発病と1956年3月死亡”ってところ。教科書にも、1953年頃からって書いてあるから、これは水俣病なんじゃないかな。なんか九州の方言って感じがする。」

「“うみの ちかくの、おおきなこうじょうから ながされた みずには、どくが はいって いた”というところに僕は引いた。いくらなんでもひどいよ！」

#### 『ここに線を引いた子は？』

○しよと||そと（おうちのそと）

○あそびたか||あそびたいなあ

○てたか||てたいなあ

○しゃくらん||さくら

○しゃかんとな||さかないの

○はよ||はやく

○よか||いいのに

○いくと||いくの

○びな||ニナ（まきがい）

（一九五三年十二月発病  
一九五六年 三月死亡）

しゃくらん しゃくと がっこうに いくと

あちゃん  
しよとて あそびたか。  
しよとに てたか。  
かあちゃん  
しゃくらん まだ しゃかんとな。  
はよ しゃけば よか。  
しゃくらん しゃくと  
がっこうに いくと。

しゃくらん しゃくと がっこうに いくと

こんな おなはしをしていた トヨ子  
ちゃんは、五さいで うに  
なりました。そして、さくらのはなをみ  
ることも がっこうにいくことも できな  
いまま、八さいで なくなりました。トヨ  
子ちゃんは、 うて ころ  
されたのです。

トヨ子ちゃんは、とてもげんきな 子ど  
もでした。まいにち げんきに うみべで  
かいや びなを とって あそんでいまし  
た。

ところが、ある日 ひよっこり ころび  
ました。それから、あるくことも おはし  
をもつこともできなくなりました。そし  
て、とうとう ごはんを のみこむことも  
むずかしく なったのです。

うみの ちかくの、大きな  
こうじょうから ながされた みずには、  
どくが はいって いたのです。うみに  
ながされた どくが さかなや かいのか  
らだには いました。その さかなや  
かいを たべた 人たちが、 う  
うて くるしむようになつたのです。

「はよ がっこうに いったか」という  
トヨ子ちゃんの ねがいは、 かなえられ  
ませんでした。

【資料1】 溝口トヨ子さんの詩(水俣芦北公害研究サークル『水俣病・授業実践のために 学習材・資料編(2016年改訂版)』を一部加工)

たくさんの子の手が上がるると同時に、さまざまな場所からつぶやきが起こり、つぶやきの輪は広がっていきます。

「私は“はよがっこうにいきたか”というところに引いたんだけど。この病気を治すことはできなかったのかな…。」

『そうだね。でも、この病気はどんどん体の自由がきかなくなっていくんだ。そして…、治ることはないんだ…。』

「えっ！」「ひどすぎる！」

子どもたち一人ひとり、自分の気になるところにマーカーで線を引き、その箇所や引いた理由を語り合うことを通して、事実をじっくりと見つめていきました。そして、このような活動を通して、病気の実態や工場から海に流された水銀が原因であることを知るとともに、患者の思いに寄り添っていきます。

『（当時の水俣の工場排水の写真を提示し） どうして欲しいと思う？』

「一刻も早く工場からの排水を止めてもらいたい！」

「そうしないと、どんどん被害が広がってしまうよ。」

『この病気の原因となったのは、工場の排水に含まれていた水銀でした。工場が水銀を含んだ排水をやめたのは、トヨ子ちゃんが亡くなってからどれくらい後だと思う？』

「1か月後。」「すぐにはやめられないだろうから1年後。」「1年間もこの排水が流され続けたら大変だ！」「トヨ子ちゃんみたいな患者さんがどんどん増えていっちゃうよ。」

『水銀を含む排水が止まったのは…』板書します。「トヨ子ちゃんが亡くなってから12年後。」

「ええーっ」「ひどいよ！」「おかしい！」

「工場は儲けることを優先したのかもしれないけど、命の方が優先だよ！」

「でも、何かやめられない事情があったのかな…。」

「原因がわからなかったのかな。それともわかってもやめられなかったのかな…。」

「東京だったら多分やめていた。水俣は東京みたいに人の多い都会じゃなかったから…。」

「やめたいけどやめられなかったんじゃないか…。この時代の日本は高度経済成長と言われていて、他の国に追いつきたくて必死にがんばっていた時代。亡くなった人が出ても、工場の動きを止めると他の国に追い抜かれてしまうので焦っていたのだと思う。」

「でも、本当にそれでいいの？ 私は納得できない！」。

このような子どもたち同士のやりとりを通して、

**なぜ、12年もの間、水銀を含んだ排水が止まらなかったのか？**

という学習問題が子どもたちの中に成立しました。

このときは、「名札マグネット」を用い、特に「納得できない」といった子どもの情意を受け止め、それを可視化させることで、問題追究のエネルギーを引き出すようにしました（【資料2】）。



【資料2】「名札マグネット」により、可視化された子どもの情意

## 5. なぜ日本は戦後が 71 年も続いたのか？

－ 6 年下 p. 34, 35 「憲法とわたしたちの暮らし（平和を守る）」－

『今年(2016 年)は戦後 71 年になりますね。“戦後 71 年”とはどういうことでしょう。』

と問いかけると、

「日本が関わったアジア・太平洋戦争が終わってから 71 年経ったということ。」

「第二次世界大戦が終わってから 71 年経ったということ。」

「71 年間戦争をしていないということ。」などの声がかえってきました。

『第二次世界大戦に参加した国は、何か国くらいあったでしょうか。』

このように投げかけ、資料としてスウェーデン、アイルランド、スイス、スペイン、ポルトガルの 5 か国に緑色で着色した世界地図を黒板に提示し、

『これが第二次世界大戦に参加しなかった中立国。ちなみに残りの参戦国は 60 か国だった』ということ伝え、終戦直後の家族の写真を提示しました。戦争について学習したこと（6 上 p. 118－131）を想起させるためです。

「本当に世界大戦だね。」

「こんなに世界中で戦争をしていたら、戦争のことが心底嫌いになるよな。」

「戦争はたくさんの方が死ぬだけでなく、人の心も変えてしまうもんね…。」

『きっと世界中の人々も、そんな気持ちだったと思います。その後、戦争は起こらなかったのでしょうか。』

子どもたちは首を振ります。そこで、教科書、資料集などから「戦後」に起きた戦争(朝鮮戦争、ベトナム戦争、イラン・イラク戦争、中東戦争…)を調べ、ノートに書かせました。

「この 71 年間にいったい何回の戦争があったんだ。すごい数だ！」

とノートに書き切れないほどの戦争名を書いている子が叫びました。ここで、パソコン(パワーポイント)を使って、第二次世界大戦後の 1945 年から十年ごとにまとめた「戦争地図」を十年単位で順次提示していきました。

この授業の「山場」は、戦後 71 年間、戦争をせずにきた 6 か国、その中の日本をどのようにあぶり出すかにあります。本来ならば白地図を配布し、1945 年以降に戦争した国を一つずつ調べながら塗りつぶし、最後まで真っ白のまま残った国を浮かび上がらせるという活動が妥当だと思います。なぜなら、教師が知識を与えるのではなく、子ども自身が知識を獲得していくことが大切だからです。しかし、そのような活動の時間を確保するのは難しいという事情も一方にはあります。

そのようなときこそ、ICT 機器の出番です。世界地図をパソコンで加工し、十年ごとの戦争地図としてまとめ、パワーポイントにより、テンポよく資料を提示していくことにより、子どもたちに「事実とのインパクトのある出会い」を演出することができます。ひとたび戦争や内乱が起こった国は着色され、その国はそれ以後も着色されたままです。

子どもたちは、提示を重ねるごとに、世界地図がどんどん黒くなっていくことに驚きます。そして祈るような気持ちで日本を見つめます…。2014 年(基礎資料の最新年次)まできた



【資料 3】1945 年以降に戦争や内乱が起きた国(黒塗り部分)と起きなかった国(白部分)

とき、真っ黒にそまった世界地図に、白いまま残った 6 か国。それが、フィンランド、スウェーデン、アイスランド、スイス、ブータン、そして日本でした(【資料 3】)。そこから、

### なぜ、日本は戦後が71年も続いたのか？

という学習問題を成立させることができました。

子どもたちは以下のような予想を立て、問題を追究していきました。

「空襲や原爆などを経験して、戦争は本当に悲惨なものだとわかったからではないかな。」

「博物館や資料館で戦争の悲惨さを伝え続けているからではないかな。」

「きっと日本国憲法の前文や第 9 条のおかげなのではないかな。」

「平和の大切さをこうして学んでいるからではないかな。」

以上、三つの具体的な事例をもとに、子どもたち一人ひとりが同じ方向性の問いをもてるように教材の提示や発問を工夫しながら、子どもたちとともに学習問題をつくりあげていく様子を紹介してきました。

子どもたちとともに学習問題をつくりあげていくためには、授業において子どもたち一人ひとりが社会的事象(具体的な事実)をじっくりと見つめ、「なぜだろう?」と問いをもつ姿をめざしていく必要があります。その一人ひとりの問いこそが、クラスの子どもたち全員で追究していく問いに統合されたり、増幅したりすることによって、学習問題として成立するのです。

そのためには、社会的事象を「人のいる風景」として見つめさせることがとても大切なことだと思います。

社会的事象(「人のいる風景」)を、①具体的に見る、②関係的に見る、③視点を変えて

見る。このような「見る」ことを繰り返すことによって、子どもたち一人ひとりの中にある「情意」と「知識」を行き来させ、

「おかしいよ！」

「納得できない！」

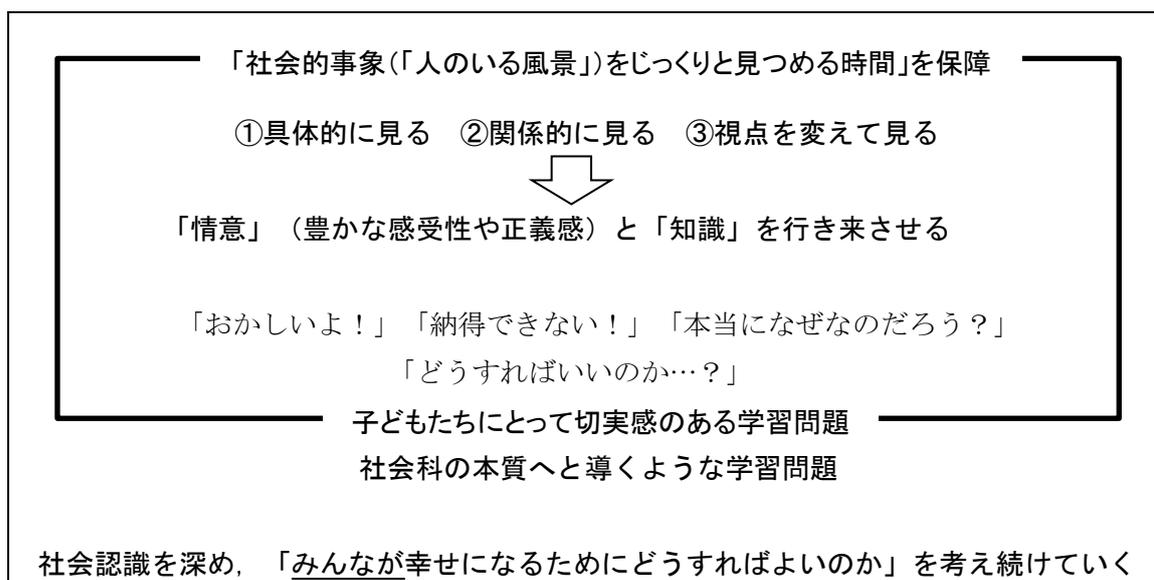
「本当になぜなのだろう？」

「どうすればいいのか…？」

といった切実感のある学習問題を子どもたちとともにつくっていくのです。

ここでいう「情意」とは、小学生ならではの豊かな感受性や正義感のことです。だからこそ、日々の授業において、社会の問題（一部の人不幸になる、犠牲になる、環境が破壊される等）や問題が起こる条件についての関心を高めていくことが大切です。社会科は、問題解決的な学習を通して社会認識を深め、「みんなが幸せになるためにどうすればよいのか」考え続けていく教科だからです。

「社会的事象（「人のいる風景」）をじっくりと見つめる時間」を保障することによって、子どもたちとともに、教科の本質へと導くような学習問題をつくっていくことができるのではないのでしょうか。



次回のテーマは、「調べる場面でのひと工夫」です。問題解決のために、子どもたちが主体的に資料を収集したり、集めた資料を整理・分析したりするための指導上のひと工夫について、考えていきたいと思います。